

【千葉】町内初の在宅医療開始、「どんな人も断らない」方針で患者増-森徳郎・大多和医院院長に聞く◆Vol.2

2023年4月21日（金）配信 m3.com地域版

創業108年を迎える「大多和医院」（長生郡白子町）を2021年に承継した森徳郎氏は、同年に町内初となる在宅医療を始めた。「できないとは言えない」。長く通っていた患者からの希望で挑戦したというが、ケアマネジャーからの信頼を得て患者は増え、現在は約70人を診る。「どんな人も断らないから（ケアマネに）重宝されているのでは」と冗談交じりに話す森氏がこんな方針を掲げる理由は。（2023年3月10日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



森徳郎氏と同院のスタッフ（クリニック提供）

——プレスリリースによると、先生が2021年に大多和医院を事業承継してから行った在宅医療は「町内初」とのこと。町を含む茂原市長生郡医師会のホームページによると、町には同院を含め4つのクリニックがあります。

患者さんの急変時などに突発的に訪問する「往診」は行われていたようですが、末期がんなどの患者さんを対象に計画的に自宅や施設で診療する「訪問診療」を行ったのは当院が初めてだったようです。

医療は公共サービスの一つであり、患者さんや地域の求めに応じて提供されるのが望ましいと私は考えています。「在宅医療を行う医療機関があった方が良い」とは承継時から思っていました。当初は初めてのことばかりでなかなか余力がなく、始めたのは1カ月半くらいが経ったころでした。

——何かきっかけがあったのですか。

大病院から紹介状を持ってきた患者さんがいました。その人は胃がんで治療の余地がなく、在宅緩和ケアの方針になったので当院で診てくれないか、とのことでした。カルテを見ると、患者さんは私が承継するまで数十年も当院にかかっていた人でした。在宅医療はアルバイトで少し経験しましたが本格的にはなく、周囲のスタッフも同様。診療報酬の算定方法も分からない状況でしたが、私の目を見て、「先生、どうですか」と尋ねる患者さんを前に「できません」とは言えませんでした。

いつかはやらないといけないことでしたし、「ここで断つたらずっと在宅に踏み出せないかもしれない」とも思いました。しかも、患者さんは当院を長く慕ってくれた人です。その場で、やろう、と決めました。

——現在の在宅患者数は70人ほどとのことですが、どんなふうが増えたのでしょうか。在宅に注力する開業医には「ケアマネジャーや病院への営業に力を入れた」と話す人もいます。

私も営業しなかったのですが、先述の通り余力がありませんでした。しかし、特にこちらから働きかけなくてもケアマネから相談されることが徐々に増え、現在は月に3~5人ほどの紹介があります。

難しそうな患者さんでも断らないためではないでしょうか。例えば、体が不自由にもかかわらず主治医意見書がないため介護介入できていない人がいました。ケアマネに聞くと、頑なに医療受診を断っているとのこと。医師としては何を言われるか分からないのでためらうかもしれませんが、私は「じゃあ、まずは話だけ聞きに行きましょうか」と提案し、ご自宅に伺いました。

お風呂に長く入っていないであろう人や、家の中が物やごみであふれており、縁側で1年ほど診続けた人もいました。ケアマネは最初、「恐る恐る」といった様子で「こんな人がいるんですが……」と切り出していましたが、一緒に仕事をするとそんな感じはなくなりました（笑）。

——ケアマネと信頼関係を築いているのですね。「これは訪問を嫌がる医療者がいるだろう」というケースもあるのは、過去の取材経験から想像されます。

私はあまり嫌ではないんですね。中には激しいことを言う人もいるのでポジティブな感情を抱きづらいことはあります。でも、患者さんは私が選ぶものではないと思うんです。医師が多い都会であれば別ですが、地方では医師が断っていたらその人がずっと医療と隔絶されたままになり、状態がさらに悪化してしまうかもしれません。まして、在宅医療は最後のセーフティネットとして機能しており、私たちはその担い手です。

医療を受けることに前向きでない患者さんであれば最低限のことを行い、その人が何か希望を伝えてくれればそれを提供する。「手は離さないけど、世話は焼かない」。在宅を含め、地方の医療ではこんなスタンスが大切になることもあると思います。

——「手は離さないけど、世話は焼かない」は印象的な表現です。患者との距離感も大切にしていると。

若いころは患者さんに対し「何とかしたい」と強く思っていた時期もありました。でも、医者が働きかけるほど嫌がって外来に来なくなる、のは起こり得るもの。今になってその接し方の意味が分かりますが、私が過去に経験したへき地医療では、このあたりの距離感の取り方がとてもまい医師がいるんですね。あれもこれもやろうとするのではなく、肩の力を抜いてその人の価値観を尊重しつつ接する。そんな方針で、「いつのまにか患者さんの容容を促していた」なんてことができれば理想だと思います。

——「患者の価値観を尊重する」は在宅医への取材で聞きます。在宅を始めてからの“気づき”という点ではいかがですか。

患者さんの生活の場に入ってその人をより深く知られること、患者さんの人生のディテールに触れられるのはとても面白いです。

南九十九里浜の白子町は海に面しており、テニスコートなどのスポーツ施設が多く、温泉もあります。保養地として利用される側面もあったからだと思いますが、バブル期は多くの人に移住してきたそうです。そういった人が今は在宅対象の高齢者になっているので、中にはとても知的な人もいます。外来でもどことなくその片鱗を感じていましたが、在宅に移行してご自宅に行くと、趣味の良い書齋があり、さまざまな本がずらりと並んでいる。「この部屋で本を読んでいるのが一番好きなんですよ」。こんな場面や話を見聞きできるのは刺激的。

外来ではどうしても医療が中心になりやすいですが、患者さんの最期を支える在宅ではその人の生活や価値観を知ったうえで、「では何ができるだろう」とスタッフや患者さん、ご家族と話し合っていくのが楽しみです。相手の世界に入り、関わらせてもらえるのはありがたいことですね。

◆森 徳郎（もり・とくろう）氏

2010年北里大学医学部卒。横須賀市立うわまち病院での勤務後、2017年に東南アジアで医療支援などを行う認定NPO法人「ジャパンハート」に加入。海外で診療や病院マネジメント、医療事業統括を担い、2021年に千葉県長生郡白子町にある「大多和医院」を承継。日本内科学会総合内科専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

